合志楓の森中学校だより

楓の森

R5.12.22（第９号）
文責：渕上 佳宏

教職員一人の重み

令和五年度もあと十日足らずで終わります。コロナ禍が収まったとは言え、不安定な国際情勢や円安・物価の高騰など、必ずしも見通しが明るい年の瀬とは言えないようです。このような中でも、開校三年目の本校が、今もなお発展・進化を続けていることに、私（校長）は感激と感謝をしているところです。

ところで、学校現場が深刻な教職員不足に陥っていることは、皆様もご承知のことと思います。令和六年度の教職員異動については、既に事務がスタートしていますが、「このままでは来年度、学級担任がいないクラスや、教える教員がいない教科が、さらに増えるのではないか」と、私は危惧しています。

教職員の定数には、「標準定数」と「加配定数」があります。標準定数は、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（標準法）」に基づき機械的に算出します。その算出方法は、必要最小限に人的資源を振り分けようとするので、当然、規模の大きい自治体ほど効率的、つまり教員一人あたりの担当する子どもの数が多くなります。「大人数」の中で学ぶことが、子どもにとって必ずしもマイナスばかりとは言えませんが、一般に「学びの遅い子ども」や「特別な配慮が必要な子ども」は、集団の中に埋もれ、取り残されがちになります。そのような不公平を是正するための措置が、「少人数指導加配」や「特別支援教育加配」などの加配定数であろうと、私は思っています。しかし、その加配定数が、まずは減らされる危機なのです。

単純に、県内の自治体ごとに、児童生徒数を教職員数で割ってみましょう（令和五年度学校基本調査【速報値】による）。すると、四十五市町村の中で、その値が最も小さい自治体は二・一人。一方、最下位はというと、政令指定都市の熊本市（一五・一人）を抜いて、合志市の一六・〇人でした。これを「教職員一人の重み」としてみると、約八倍の格差があるということですね。選挙については、一票の重みが三倍で、もはや違憲とされますが・・・？

そもそも教員のなり手が少ないのですから、「無い袖は振れない」ということなのかもしれません。しかし、どの自治体も一様に加配定数を剥いでいったなら、前述した「教職員一人の重み」の格差は益々拡がります。そして、その被害を最も大きく受けるのは、合志市をはじめ、児童生徒数の増加が著しい自治体の学校で学ぶ、とりわけ「取り残されがちな子どもたち」ではないでしょうか。

本校は、コロナ禍においても、ＩＣＴ活用など教育工学的アプローチから生徒の教育を保障し、全学調・県学調等からも明らかなように、むしろ学力的には顕著な向上をみせてきました。また、次年度になってバタつくことがないよう、既に教頭や各主任等に、先手を打って「教育の質を落とさず省人化する方策」を練っておくよう指示も出しています。しかし、「学びの遅い子ども」や「特別な配慮が必要な子ども」への教育が、そういうテクニカルな工夫だけで補えるとは到底思えません。「誰一人取り残さない教育」を、絵に描いた餅にしないために、「マンパワーを落とさない」他に、何か良い方法はないものでしょうか。

壁新聞から見える「総合的な学習」の意義

熊日新聞の記事に掲載されていましたし、本校ＨＰにもコピーを拡大して閲覧できるようにしていますので、ご参照された方も多いかもしれません。二年生の総合的な学習の時間で、壁新聞グループが取り組んだ作品が、熊日新聞コンクール中学新聞の部で、熊日賞・最優秀賞・優秀賞（第一～三席）を受賞しました。なお、グランプリの熊日賞（二年三組「ＡＤＶＡＮＣＥ」）は三年連続という快挙です。

中学校の総合的な学習の時間は、二〇〇三年に創設され、二十周年（二十一年目）となります。その目的は、「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること（文科省ＨＰから）」とされています。

この目的を見た時、「まさしく壁新聞制作の取組そのものだ！」、つまり、賞を獲ったという結果以上に、その制作過程での生徒たち（一組・二組も）の主体的で対話的な深い学び、そこに大きな価値があったと私は感じました。壁新聞の企画・取材・編集等を通して養った資質・能力は、ペーパー学力や受験学力をはるかに超えた「未来を生き抜く学力」に他なりません。出品前に 光永 先生が「賞を獲るのは間違いありません。」と自信満々だったのも、「生徒たちのそのような学びを見ていたからか」と納得したところです。

学校HPの
QRコード